
ネギま! ~ もう一人の子供先生ウルマ!?(仮)

ユキ & レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！〜もう一人の子供先生ウルま！？（仮）

【Nコード】

N0736Q

【作者名】

ユキ&レイ

【あらすじ】

魔法学校を卒業した主人公、ウルル・エルフィード。彼はネギ君とお友達。卒業後の試練、それは

ネギ「日本で…先生をやること…」

ウルル「（ワシントン…え！？そんなネギ君と違う…）」

ごちゃごちゃ他のみんなが言ってるうちにウルルは文字の上から魔法で塗る。

ネギ「ねえ、ウルルは？」

ウルル「僕も同じだよ。」

『日本で先生をやること』に塗り替えた。精密に隠蔽する薬までつかって…

プロローグ（前書き）

どうもどうも、雪の変人こいびとといっています。

ネギまでは初めて書きます。まだまだ拙い所も多々ありますが、よろしくです^^^

プロローグ

僕の名前はウルル・エルフィード。

僕はウェールズの魔法使いたちの住む村に生まれた。

僕は俗に言う『天才』というものらしい。

僕の両親は「悠久の風」に所属し戦闘能力A+を誇る戦闘のプロ。でも僕はそんな両親をもってはいるけど体が弱く、運動ができない。なぜ天才か。それは祖父ゆずりの『知能』のほうだ。祖父は普通ならありえないが一歳以下のときに自我をもつ、言葉のキャッチボールができるなど、ものすごいかしこい、いや『天才』の域をこえるような人だったと聞いている。僕もそう。僕は一歳の頃から記憶をもつ、しかも完全記憶能力だった。

僕は一歳の頃、父にたずねた。

「おとうさん、どうしたらおとうさんみたいにつよくなれるの？」

「んゝ…かしこいウルのことだ、勉強して体を丈夫にしたら…」

「あなた、そんなこと言ってもウルにはわからないでしょ。」

そんなでほとんど聞けなかった。けど『勉強をして』というのは聞いたので僕は学ぶことに専念した。

家にあつた魔導書を読み漁った。でも魔法のことがかかれたものはなく『魔法薬』の書はいっぱいあつた。だから僕は魔法薬や、発動媒体やらと書いてある本を上手く、子供とは思えないような技能で読んで覚えていった。そのうちにお父さんから、体が弱いのを克服

するためにと『気』の使い方も教わった。このときは長い間使ったとは出来なかったが次第に継続できるようになっていった。

僕が二歳になる頃、僕は1人の、英雄と呼ばれる人が訪ねてきた…

「へえ…こいつがお前たちの子か…」

「…というか『ナギ』、お前生きてたのか…」

訪ねてきたのは『ナギ・スプリングフィールド』という人だった。一応家にも歴史の書があったので名前は知ってはいた、が死人とされていたので僕はものすごく驚いた。

「俺の子より1歳下か…よし、ウルル…だったか？ネギっていう俺の息子にあつたらよろしくな。」

それだけいって僕の家から出て行った。

「おい、ナギ！」

その後数ヶ月たって事件が起こった。

とある村で悪魔の襲撃だった。

僕の両親はその事件の加勢に行ってしまった。その時、両親は死んでしまった。と聞かされた。

その時からだろうか、僕はものすごい臆病、怖がり、弱気…かなり引っ込むようになった。

僕は親を失った時、一時的に魔法学校の校長先生に引き取られた。と同時に入学まで。

僕は入学したのはいいけどずっと家に引きこもっていた。外に出るのが怖かった。

そこで校長は世話係にと一人の男性を僕の家を送ってきた。

「やあ、君だウルル君だね。」

その人の名前はディフォルト・ウィンザード。当時はまだ11歳。彼もまた、両親を失い校長に引き取られた人らしい。

彼は僕を何度も学校に行かせようとしていた。僕は嫌がった。でも数ヶ月経って僕は折れた。学校に行くことにした。

学校というものは書物で知ってはいたが来たのは初めてだった。たくさんの部屋、本、人…

僕は最初は注目の的だった。2歳児が普通『学校』などには行かないからだ。

ふと僕は一つ思い出した

『強くなるには…』

「勉強をして…」

僕は図書館で勉強するようになった。当時、僕は魔法薬に関しては右出るものがいなかった、いや、僕が卒業するまではずっと僕が1番だった。

そして僕が3歳になる頃、学校に『ネギ・スプリングフィールド』という人が入学してきた。

僕は当初は関係ないと思っていたけどふと一つの言葉を思い出す。

『ウルル…だったか？ネギっていう俺の息子にあつたらよろしくな。』

この言葉を言ったのは確か『ナギ・スプリングフィールド』という人だった。ということは入学してきた『ネギ』というのはその人の息子なんじゃないか、と考えた。

でも僕はその人にあう勇気がなかった。僕は怖がりのままだった。このときまだ一回も教室には入ったことがない。ずっと図書館に籠りつきり。あったことがある人はディフォルトだけだ。

ある日、図書館に勉強しに来た二人がいた。僕は来たときに隠れてしまった。

その日彼らは夜までいた。

「ネギ…まだ？」

「うん…もうちょっと…」

その時、彼がネギであることを知った。でも僕は話しかける勇氣なんてものはなかった。

ガタッ

僕は隠れようとして動いたときにいすに当たってしまった。

「誰!？」

ネギ君が気づいた。僕はすぐに見つかった。

「え…?僕より年下…?」

そう、僕は魔法学校では最年少、多分公にはされていないと思うので

そのときは知ってる人はディフォルト一人のはずだった。

「君…もしかやウルル…君？」

しかし何故かネギ君は知っていた。隣にいた女の子は知らない様子で「誰？知り合い？」などと言っていた。

僕は首をたてに振って答える。その時僕は縮みあがっていた。

「怖がらなくてもいいよ。僕はネギ・スプリングフィールド。」

「…なんで僕のこと知って…」

僕はこのときはわからなかったが次の言葉で理解する。

「お父さんがね…」

ネギ君のお父さん…ナギ…その人が僕のことにもネギ君に教えたのだろう。

「えっと…僕、ウルル、ウルル・エルフィールドっていいです…」

それから僕は初めて、ディフォルト以外の人と打ち解けた。

僕たちは勉強仲間みたいなものだった。教え合い、試しあう。いろいろとやった。

このときあたりから僕は授業に出るようになった。が基本的に図書館で勉強したところだったのでずっと復習みたいなものだった。

僕は6歳になった。その時、事故が起きた。ディフォルト君が実験

に失敗し右腕を失った。

爆発が起こり障壁を満足に出していなかった彼は守ることが出来ず肩から先、右腕すべてが消し飛んだ。

その後、彼は昔の僕みたいに引きこもってしまった。腕は返らない。彼は絶望してしまったのだ。

僕は彼を元気づけようとした、が彼は何も聞き取らなかった。ただ

「この腕さえ戻れば…」

という言葉が静かな場所に鳴った。

僕は今までの知識を元に義手を作ることにした。粉々になってしまった腕を治すのは難しいとっていたので作ることにしたのだ。

数ヶ月かけた。僕は普通の腕を再現した腕を作り上げた。僕はそれを彼の元へと持っていった。

「ねえ、ディフォルト、入るよ。」

僕は入って彼に義手も見せる。でも彼は何も言わなかった。僕はつけてもいいか尋ねた。答えは「勝手にしろ」だった。

腕をつけて僕は神経を義手につなぐために特殊な術式を施した。

「多分これで大丈夫…。動かしてみて。」

彼は義手義足は不便なものと思っていたらしかった。彼は腕をゆっくりと動かすと

「ん…？なんだ…」

ぐるぐると動かす、まるでふつうの、本物の腕のように。

「すごい…これは…」

彼はすごく喜んだ。そして元気を取り戻し、学校へも出てきた。
このときからか、僕は彼をディルと呼ぶようになった。

それから二年後僕、ネギ君、ディルは卒業する。

プロローグ（後書き）

適度に更新していきます^^

一応原作に従順に書くつもりですがところどころオリジナルが混ざります。

では、また。

1 限目 今日から僕は先生に！？（前書き）

はいどうも、雪さんです^^

書いてて思ったのですがネギまで書くのってすごい難しいですね。
原作に沿うっただけでもものすごい難しいです^^；

でもがんばって続けていきますです、はい。

では、拙い文ですが、どうぞノ

1 限目 今日から僕は先生に!?

僕は魔法学校を卒業した。そのときの試練として与えられたのは『ワシントンでホワイトハウスのSPをやる』だった。

「日本で…先生をやること…」

ネギ君はこうだった。僕は違うことに焦った。そして僕は魔法で書き換え、魔法薬で隠蔽した。

「ねえ、ウルルは？」

「僕も同じだよ。」

僕の卒業証書に書かれたのは『日本で先生をやること』に書き換えられた。

「ん、君たちも日本で先生か。」

そこに僕のお友達…デイル、デイフォルト・ウィンザードが来た。

「え？デイフォルトさんですか？」

「そうだよ、ほら。」

そういつて卒業証書を見せる。そこには『日本で先生をやること』と書かれていた。

「同じ学校でってことならいいんだけど…」

僕はふと口走った。そんなことないよね、と思ってしまったから。すると、後ろのほうから

「安心せい、皆同じ学校じゃ。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、頑張りなさい。」

僕は安心した。一人だけ違うとかだったらどうしようとか思ってたから…

「「「はい。」」」

その後、僕たちは日本へと飛び立った。

僕とデイルは日本に到着した。ネギ君はなんでも1便早く行ってしまったらしい。

「僕たち、遅刻かなあ。」

「まあ遅刻は遅刻でしかないさ。」

そうだね。にしても

「人、多いなあ…あう…」

僕はいまだに人にあまり慣れなかった。こんなで先生なんてやれるのか、と心配なくらい。

「さ、ウルいくぞ。」

「あうゝ……」

「ん？あ、そうか……よし、ウル、鞆からあれを出してくれ。」

「え？……ああ、うん。」

僕はあれ……小さなビンを取り出す。中にはミニチュアのような車が入っている。

「ウルも早く人になれないとね。あ、認識阻害と人払いも。」

僕はフィールドを展開し人がいなくなるのを待つ。

「にしてもウルの技術はすごいな。そんななんでも携帯できる小瓶とか……」

この小瓶、ふたを開ければなかを取り出せる仕組みになっている。

「そんなことないよノノんじゃ、だすよ。」

ふたを開けると中から車が出てくる。そしてそれに乗り込む僕たち。

「さ、行こう。」

僕らは目的地、麻帆良学園へ車を走らせた。

一応ルートは送られてきたパンフレットに地図が同封されていたのでわかった。なるべく短時間でつくために一番短距離のルートを選ぶ。

「そこを右、次に左…」

「にしてもウル、僕の運転によく耐えられるね。」

この台詞、実は今の車の速度は100km/h。認識阻害やらでだれにも気づかれてはないがぶつかることはあるので心配だ。でも

「だって昔からデイルの運転こうだったもん。」

そう、ほんの1年前に免許をとったばかりだというのに彼はものすごい運転の仕方をする。そして僕はいつもその運転に付き合わされた。だからもう慣れてしまったのだ。

「あ！そこ左！！」

「わつと！」

思い切りハンドルを切ってドリフトのようにして曲がる。全く…危ないったら…

「あ、ここだな。」

女子中等部。書かれた範囲に入った。車を一旦止めてあたりを見ると

「おや、遅い到着だね。ネギ君と学園長がお待ちだよ。」

そこにいたのは僕も一度、ネギ君と一緒に会ったことのある

「あ、タカミチさん。」

「え？知り合いなのか？」

横にいるデイルは驚いている。それもそうだ。だって彼はタカミチさんに会ったのは初めてだもの。

「まあちよつとした仲さ。さ、学園長室に急ぐ。」

そう言つて振り返り歩き出すタカミチさん。僕は車をしまいすぐについていった。

学園長室前

「高畑です、もう二人、ウルル君とディフォルト君をお連れしました。」

「おゝ着いたか、入りたまえ。」

「さ、二人とも行くよ。」

僕らは中へと入った。

「おーおー君がウルル君とディフォルト君かの。」

僕のほうとデイルのほうを交互にみてぬらりひょんみたいな老人がいう。

「む、なにか失礼なことを考えなかったかの？」

「ふえ！？なんでもないです！；」

なんではれたんだろうと想いつつも前の老人を見る。

「まあいいじやろ。もうネギ君には説明したが君たちは教育実習とゆーことで今日から3月まで教師をやってもらうのじやが…教科とかはもう言ってあったかの？」

僕とデイルは顔を見合わせてから首を横に振る。

「そうか…えつとじやな、ウルル君には世界史と図書館司書、あとネギ君のクラスの副担任をしてもらう。ディフォルト君には保健体育と保健医じや。一応じやがネギ君は2・Aの担任と英語じやよ。」

ふえ…なんか僕だけ多いような気がするような…

「ふおつふお、すまんのウルル君、君は本が好きとのような事を聞いている、じゃから図書館司書を頼むことにしたのじやが…いやじゃったかの？」

「ふえ！？えと…大丈夫です！やります！」

そついうことで僕の役職とかが決まりました。

「あとな、二人とも、この修行はおそらく大変じゃぞ。ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

はう…そんなプレッシャーかけなくても…

「はい、僕はやります。」

デイルはすぐに答えた。

「ふむ、ウルル君はどうかの？」

「あう…が、頑張ります…！」

僕も負けてはいられない…けどあんまり自信ないなあ…

「…うむわかった。では今日から早速やつてもらおうかの。指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君。」

「はい。」

後ろのほうから声がする。そして扉がひら

「へう！？？」

「あら、ごめんなさい。」

きれいな女性…

「わからないことがあったら彼女に聞くといい。」

「よろしくね。」

「えう…は、はい／＼／」

「お、そうじゃ、あともう一つ。」

僕はしずな先生から離れて話を聴く。よこで「あら、残念。」としずな先生が言ったような気がしたけど…気のせいかな。

「ウルル君は図書館司書室、デイフォルト君は保健医待機室で寝泊りして…ネギ君なんじゃが…このか、アスナちゃん、しばらくネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの。」

「げ。」

学園長の言葉にだまっていた一人の女生徒が反応する。

「もっつ！なにからなにまで学園長ー！」

「まあまあ明日奈、かわえーよ、この子。」

「ガキは嫌いなんだってば！」

あう…この人怖いよ…

「ねえデイル…僕頑張れるか不安になってきたよ…」

「まあ、頑張れ。」

へう…そんな…

「ごちゃごちゃ言い合ってから生徒二人とは離れ、いるのはしずな先生とネギ君、デイル、僕の四人。」

「さて、僕は保健室のほうに行くかな。」

「保健室はここを降りて左よ。」

「ありがとうございます、しずな先生。」

そう言つてデイルも持ち場に行った。

ネギ君はネギ君でなんか緊張してなさそうだし…あう…

「さ、ウルル、行こう!」

いつのまにか僕は教室の前に立っていた。はう…緊張が……

ずっとスキマからクラスの中を見る。ざわざわとしているんな人が…

「あう…僕、やってけるかな…」

「大丈夫、ウルルならできるよ！あ、そうだ、これクラス名簿。」

僕は名簿に目を通す。と総勢31人の年上の女の人…はう…なんかもつと緊張してきちゃったかも…

「僕もドキドキするけどウルルと一緒になら大丈夫な気がするんだ。だから頑張ろう！」

あ、ネギ君…うん。

「うん、僕頑張るよ。」

決心した。僕でも頑張れる。そう信じて。

「さ、行くよウルル。」

そう言ってネギ君は扉を…

「あ、ネギ君危ない…」

僕は黒板消しトラップに気づいたんだけど言うのが遅かった。ガチャ！ゴガ！ガガガ！…

盛大にネギ君はトラップにはまってしまった。教室は笑いに包まれた。

「あらあら。」

しずな先生も苦笑いしている。と笑いが止まる。

「えっ…」「あ…あれ…？」

「えーっ！子供！？」「君大丈夫！？」「ごめんてつきり新任の先生かと思つて。」

ネギ君が生徒たちに囲まれる。はわ…僕こんな状況無理だよ……

「いいえ、その子があなたたちの新しい先生よ、あとこの子もね。」

そう言つて僕も前に出される。

「ふえ！？あ、えと…あの……／／／」

「さ、ネギ君もウルル君も自己紹介ね。」

「は、はい。」

みんなが席に着き静まつたところで自己紹介。

「ええと、僕…僕、今日からこの学校でまほ…英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしく願ひします。」

ネギ君の自己紹介が終わる。次は僕の番だ…あう…

「えっと…その…ぼ、僕はウルル・エルフィードって言います。担当は世界史と一応図書館の司書です…ネギ君と同じく3学期の間だけけど…よ、よろしく願ひしましゅ！あう…」

一旦静寂…そして…

「『『『『キヤーツ！！可愛い』！！』』』』」

ほぼ全員の生徒が僕とネギ君に押し寄せてきた。僕とネギ君はもみくちやにされる。

いろいろな質問をされたり抱きしめられたりと。中には「この子もらっていいんですか？」としずな先生に質問している生徒もいた。その中で僕は耐え切れなくて気を失ってしまった…。

僕は気がつくと保健室にいた。

「まったく、ウル、君はどれだけ人に弱いんだい？」

「えう…ごめんなさい…」

あう…だって…あ、そういえば…

「今って何時？」

「そうだな…そろそろ授業が終わる時間か。放課後になるな。」

ふえ！？僕、そんなに寝てたの？？わわ、HRに行かないと；

「えっと、ありがとデイル。僕、教室に行かないと；…」

僕は保健室を飛び出した。

「まったく、ウルも苦勞人だな…何かいい精神的治療でも考えてみ

るか。」

キンコーン…

HR終了のチャイム。僕は教室でネギ君の連絡事項だけ聞いて、このあとの活動である図書館司書のために図書館に移動することに…

「あ、そういえば僕まだそこまで把握してないや…」

行き方を知らない。と、ふと名簿を見たときのことを思い出した。

「27番、宮崎のどかさん…学園総合図書委員…」

僕は案内してもらおうとおもった。けど話しかける勇気がなかった。

「あう…どうしよう…」

「あの…ウルル先生？」

と僕に後ろから話しかけてきた。

「はわっ！？だ、誰？？」

振り向くとそこにはのどかさんが居た。

「す、すみません！驚かすつもりはなかったんですけど…あ、お体は大丈夫ですか？朝からずっと保健室にいたみたいですけど…」

「あ、えと、大丈夫…です／＼」

僕は気絶したことが恥ずかしかったので少してれてしまった。あ、そうだ。このまま…

「あの、えっと、のどかさん、ですよね？」

「え、先生もう覚えてくれてたんですか？」

あ、そっか、まだ一目だし覚えることって少ないのかな？

「えと、その…僕覚えるのは早くって…その、名簿見たときにその…」

「す、すごいです…あ、先生そういえば図書館司書なんですよ。よろしければ一緒に…」

「おゝ、のどか、もうウルセンセに〜？ハハ」

そこに14番の早乙女ハルナさんが…

「え？／＼そんなんじゃないよ！／＼／」

「そんなに照れなくてもいいです。私たちはわかってるですよ、のどか。」

もう一人、4番、綾瀬夕映さん。

「もう、違っつてば！／＼…えっとウルル先生、よろしければ図書

館まで案内します！／／／」

そういつて僕の手を引っ張ってこの場から走り出した。

どこかの廊下…

「あ、そういえば図書館に持っていかないといけない新刊があるんです。」

ふとのどかさんがそう思い出す。

「えっと、じゃあ僕も付き合いますね。い、一応司書ですし…」

「あ、ありがとうございます。」

そういつて職員室のほうへ届いた新刊をとりに行き。新館をもって歩き出す…のどかさん。

「えと…僕も手伝ったほうが…」

「だ、大丈夫です…。」

はたから見るとふらふらしてて危なっかしい。僕は見かねて

「や、やっぱり持ちます！」

僕の勇気をだした瞬間だった。

「ふえ？ウルル先生？？」

僕はちょうど半分くらいを取って持つ。あう、ちょっと重いかも…僕は体が弱いのでちよつとふらついた。でも気づかれたらまた「いいですよ。」といわれると思ったので『氣』をつかって自身を強化した。これもそんなに長くもつかわからない、ので

「さ、い、行きましょう。」

「は、はい。あの、ありがとうございます／＼」

僕たちは図書館へと急いだ。

図書館の前…

「これが図書館…なの…？」

島一つに建物がたっている。図書館島というらしい。

とりあえず新しい書をしまつためにのどかさんと新刊をしまつスペースに行き、ちゃんと順に並べた。

「ウルル先生、ありがとうございます。手伝ってもらっちゃって…」

「あう、その、一応先生だしその、司書でもありますからその…あ、そうだ、僕のことはウルでいいですよ？その、かんじがいそうですね？」

僕は仲良くなれそうな人には『ウル』とよんでもらうようにしている。と言ってもデイルしかそう読んでくれない。ネギ君にもウルでいいって言ったのに何故かウルルのままだし…

「えと…いいんですか？」

「は、はい！^^」

「えと…ウル…センセ？」

「はい！なんででしょう？」

「な、なんでもないです！／／」

その後、司書室に移動し本のことかで話し合っていたら時間はどんどん過ぎていった。

「あ、そうだ先生、教室に行きましょう。」

いきなりの提案だった。

「ふえ？何か忘れ物でもしたんですか？」

「えと、その、そんなところです／／／（歓迎会やるって言っちゃダメ…なんだよね？）」

ということで僕とのどかさんは2・Aの教室へと移動する。

途中の廊下

僕とのどかさんは話しながら歩いていると前に見た顔が…

「読心術か…それを上手く使って…」

そこにはネギ君とアスナさんだった。あう…あの暴力的な性格の人
って苦手なんだよね…

「あ、ウルル！どうしてここに？もう司書室にいるものかと…」

「えっと、のどかさんの忘れ物をとりに…」

「ネギ！荷物取ってくるからそこで…」

ガラッとドアを開ける、すると…

パパパーン！！とクラッカーの音、そして

『ようこそ！ネギ先生＆ウル先生ーっ！！』

僕とネギ君とアスナさんは固まった。そして

「そーだった今日歓迎会するとか言ってたんだ。忘れてた。」

とアスナさんは言った。のどかさんはくすくす笑って

「さ、ウルセンセ、いきましよう」

そう言っ僕はのどかさんに押されて中へと入っていった。

「あーっ本屋がもうウル先生と仲良くしてるー!!」

「えっ!? そんな…あと私本屋じゃないです」

アハハハと笑うみんな。うん、楽しそう。

このあともいろいろやっていた。雪広さんからブロンズ像のプレゼントがあつたりなんだかネギ君がアスナさんとなにかしてたり最終的にアスナさんでってネギ君はそれを追いかけて…

「や、ウル君、お疲れ様、と言つても気絶してたらしいね。」

「あう…タカミチさん…」

そついつて笑うタカミチさん。だつてまだたくさんの人に囲まれるのになれてないんだもん…

「まあウルだしな。これから頑張ればいいんじゃないか？」

と、ここにはいないはずのデイルの声…あれ？

「なんでデイルいるの!？」

「ああ、タカミチさんに呼ばれてな。そついえばすごいじゃないか、タカミチさんってあの…おっと、ここではいえないな。またあとで。」

「そんなタカミチさんとか、僕のことは呼び捨てでかまわないと…」

「いえ！そんな。タカミチさん呼び捨てなど。これでも譲歩します！ほんとだったら様付けでも…」

「それは…まあいいよ。」

なんかデイルの変わりよう……タカミチってそんなすごい人だったっけ…？

そんなこんな話してデイルとタカミチさんは離れていった。

その後もなんやかんややってその日はお開きになった。なんだかみなすごいはいしゃぎようだったなあ…途中でネギ君とアスナさんがいないのに気づいてもものすごい勢いで探しにいった…廊下のほうからすごい声がして…

「すごいなあ…僕もあんなふうに…」

僕はその日、司書室で日記を書いて、すぐに寝ることにした。

1 限目 今日から僕は先生に！？（後書き）

はい、お疲れ様です^^

かなり書くの難しいですね…

他に書いてるもののほうが簡単なのかわかりませんが上手くかけない感じがします。

でも頑張っていく所存ですので、応援してくださる方はよろしくお願いしますです^^

では、また次回、お会いしましょう！

よろしければご意見、ご感想など書いてくださいね^^

そういえば書いてから同じような題名の作品があることに気がついた今日この頃。

2 限目 新薬『思い込み薬』（前書き）

はいども、ユキさんです^^

いやはや、センターおわって人生も終わりたいとかおもったり（嘘）

今回、今まで書いた中で一番長いです^^；僕のほかの作品を比べたら2倍量くらいあります（1話分）

今作はほぼ原作どおりにオリジナルを混ぜて提供しておりますので
ご注意を。

では、2話目、どうぞ^^ノ

2 限目 新薬『思い込み薬』

僕は日記を書いてから寝ようとちょうどベッドに向かったとき…

「ウルル〜!!」

パンツとドアを思い切りあけて入ってきたのはネギ君だった。

「な、なに? どうしたの?」

「そ、それが…」

説明を聞くとクラスのアスナさんに魔法がばれてしまったらしい。でも黙っててはくれているようでなんかおかえししたいとか。で惚れ薬とかできないかと相談にきたとか。

「あう〜…惚れ薬は作っちゃダメなんだよね…」

「え? そうなの?」

「うん…捕まっちゃうよ。犯罪だし…あ。」

僕は一つ、オリジナルの薬を思い出す。これなら別に惚れ薬とかじゃないからいいよね…

「ネギ君、明日までにいいもの作っておくね。だから、今日のかえって…ふあ…寝てていいよ。」

言ってる最中にあくび。僕も今日はずっと寝てたはずなのに疲れてるみたいだ。

「ほんと？ありがとウルル　じゃあお休み！」

そういつて颯爽とさつていったネギ君。

ふぁ…眠い……時間は今は午後22時…23時？…まあいいやぁ

「別荘つかおうかなあ…」

僕は長年かけて作った『別荘』、中での一日が外での2時間になるという魔法具。僕の魔力じゃこれが限界。もつと魔力をためられる『器』があれば一日が1時間とか作れたんだけど…

『別荘』は僕が司書室に作った地下室においてある。流石に司書室にそのまま置いておくのも危ないからね。

「さ、確かあの薬は作るのに10時間はかかるんだよね…」

早速僕は別荘に入って『あの薬』の作り方を書いたレシピを出してきて作業に取り掛かった。

が眠かったので一旦眠ることにした。

10時間くらい寝たのちおきて早速作業をすることにした。

「えっと…これと、これ…あとこれも…」

いろいろな常備してあった魔法薬をまぜ、それに材料を加える。この薬、出来たらなんか青汁みたいな色になる。さすがにそれは飲む気なくなるだろうから着色する。うーん…お茶のいろ？薬って感じ

じゃないかな…黄色？…あ、ピンクとかいいんじゃないかな？？
ということで僕はピンクになるように着色料を加える。

「あとはこれを7時間放置して…そのあとに…これを加えて煮て…
で固まらせて切って固形にして…使うときは水に溶かしてつかうつ
と。」

僕は確認だけして7時間放置。その間に僕は一応食事とか勉強とか
お風呂とかを済ませようと行動する。

「まずはえつと…ご飯かな。」

寝ていたものだからおなかがすいている。僕は軽く適当に朝ごはん
レベルの料理を作る。ハムエッグにトースト、ホットミルクティー…

「いただきます。」

僕は食事を始める。ここのところデイルに料理を任せっぱなしだった
から失敗するかもと思ったけど意外と上手くできたのがうれしく
てどんどん食べていけた。

食事を終わると僕はとりあえずお風呂に入ることにした。

「タオルと着替えと…」

僕はお風呂が大好きだ。すっきりするし疲れが抜ける。あう、なん
かおっさんぽいかも…。そういえばネギ君はお風呂嫌いだったよね
…なんで嫌いなんだろう…そんなことを考えながらお風呂に入る。
まずは浴槽に入る前に頭と体を洗う。これからだ。

「あう…髪の毛切ろうかなあ…」

いつもは短く見えるように工夫してるけど一応長い。最後にいつ切ったか覚えてない。長さは腰くらいまでである。基本的に魔法薬で短くしてるけどあれも一日しかもたないやつだし…

「最近は効き目が短いかなあ…」

抗体でもできたのか一日もたないときもある。そろそろ切るかそれとも…

「もうそのままでもいいかなあ…」

さつきから『なあ…』ばかり…悩みすぎ。よし。

「デイルに相談しよ。」

ということと髪の毛を洗い終わる。これだけで10分以上かかる。次いで体。これもきれいだ好きなので10分は絶対かける。今日はそんなに汗をかいてないはずだから10数分だった。体を洗っていると毎回思うことがある。

「僕もへんな失敗したなあ…」

僕は男の子…のはずだ。なのに今、体は女の子。ちなみに昨日は男の子。その前は女の子。

「なんであんな変な薬できちゃってしかも…」

変な薬、それはお父さんの書棚にあった本の中に名前のない薬の作り方がのっていた。それに興味を持った僕は昔、というか一年前に

作っただけだ…

「一日ごとに性が変わる薬…へう…」

ちなみにこの薬、僕が入れるものを間違えていたみたいなので僕は失敗したと思う。多分あれは普通に性転換する薬だ。『無限草』というものを入れないといけないのを外見の似ている『一日草』というものを入れてしまった。完成したのだが僕はその薬をかぶってしまった。それから、僕は一日一日で違う性で過ごしていた。

「はう…無限草があれば元に戻るのになあ…」

そう、『固定』するのに無限草がいるらしい。一日草は周期的に咲くが無限草は咲いたらずっと咲き続ける。この継続の部分が固定の作用と同じらしい。

「まあでも外見変わんないしばれないよね…成長しない限り…」

とりあえず考えるのをやめて僕は湯船につかり、数十分はお風呂にいた。

お風呂から出たらまだ5時間は残っているので勉強でもしようと思った。

「まだまだ世界は広い…」

これでも歴史は好きなんだけど教えるとなると広い知識が必要だと思っので僕はそれぞれの時代と地域に分けて覚えていく。

「はう…ネギ君は英語だから楽なんだろうなあ…」

とつい愚痴がでる。そりゃあ僕も英国人だから英語はお手のものさ。でも教えるのは別だろうけど…む、楽とか思っちゃダメだ。そんなんじゃ挫折が見えてくる。そうおもって僕は前の世界史教本に集中した。

「コミンテルンが…ぶつぶつ…」

ピピッ　ピピッ

僕がセットしておいたアラームになる。7時間の放置が終わったみたいだ。

「よし。あとはこれを入れてつと…あとは煮る。えつと…沸騰しない程度で30分か。」

僕は温度を7〜80　になるようにして30分待つ。その間も教本をみて覚える。

「ムツソリーニ失脚…ぶつぶつ…」

ピピッ

また30分が経過する。

「次は固める…えつと…冷凍庫…だと時間かかるか…じゃあ…」

僕は箱を取り出す。箱は二重になっていて中の箱の外側にも空間がある。

「えっと…冷却用のはつと…これだっけ？」

僕はラベルに『ice spell』と書かれたものを出す。確か氷系の魔法をこめたやつ…だったかな。一応液化してある。

「これを外側にいれて…両方の箱のふたを閉めてつと。」

僕は箱を閉める。とすぐにカチツと音がなり、外側の箱をあけると液体がなくなっている。中の箱を開けると…

「うん、固まつてる。」

固形になった僕のオリジナルの薬。

「『思い込み薬』完成 さ、これを切って何かに包んで…箱にいれて…あ、あと注意書きつと。」

僕は注意書きに「水に溶かして使うこと！でないと効果が強すぎる！」とかく。

「そだ、使い方かかないと意味ないや。」

使い方と書いた紙に「この薬の水溶液を飲む際にこれはどんな薬、と思い込むとそのとおりの効果がでる。そのかわり例として『強くなる』などは実際には強くなったりしないので注意。惚れ薬として使うなら『これを飲んだら自分の意中の人が自分を好きになる』などと考えてつかうこと。『惚れ薬だ』とだけ思っ使用と飲んだ人を見た人全員が飲んだ人に惚れてしまう。ネギ君、考えて使っつね。一応4個に分割しといたから。」と最後にコメントを入れて包んで完成。

「よし、これで終わりつと…あ、そうだ。いろいろ切れちゃったから学園長に頼んで送ってもらおうと。」

というわけで僕は出来た『思い込み薬』を持って出た。外はもう25時、午前1時だ。

「さつてと…僕ももう一回寝よう…」

ということで僕は眠りに着いた。

午前7時。僕は目を覚ました。

「ふぁ…ちよつと遅いかも…」

とりあえず簡易的なキッチンがあるので朝食をパパッとつくる。と

「ウルル！おはよう！…」

バンツと思い切り扉が開きネギ君が来た。

「おはよ…ふぁ…あともつと静かに入ろうよ…ふぁ…」

僕はまだまだ眠いのかあくびばかりしてる。

「ゴメンゴメン　でさ、昨日言ってた…」

「あぁ…それは…たしか机の上に包んで…」

「これ？」

「あ、うん。とと、こげるこげる。」

僕は箱を渡すとともに朝食を完成させる。

「ありがとウルル！」

「うん。あ、ちゃんと使い方書いておいたから読んでね。一応今説明しとく？」

「うん…大丈夫！僕一回戻らないと。じゃあまた朝のHRで。」

「そっか、うん、またね。」

そうして颯爽とさっっていく。ネギ君、なんか台風みたいだね…

「さ、僕は朝ごはん食べて早く行かないと。」

と、いうことで朝食を食べて、着替えをして…

「髪…」

どうしようかと考える…そのままか、それとも短くするか…と考えていると

「ウル、遅いぞ。そろそろ遅刻だ。」

ちょうどよくディルが来た。

「ねえデイル、髪、どうしたらいいと思う？短くしたほうがいいか長いままか…」

「ふむ…別にどちらでも合うとは思うが…とりあえず今のことだ。早くしないと職員会議が…」

「ふえ！？職員会議！？今日そうそうにあるの！？はわわわ…とりあえず結んでいけば…いつそ薬…」

僕はあわてる。職員会議があるのは聞いてなかったから。なんでも新任の僕たちの紹介をするとか。

「ウル、あわてて何も手がついてない。結ぶの面倒だから…ほれ。」

デイルは僕の薬棚から一つの薬を出してきて僕に渡す。『髪を短くする薬』だ。

「とりあえず髪のこととは放課後でいいだろ。さ、行くぞ。」

「へう…あ、待って！…」

僕は薬を飲む。と髪がすつと短くなっていく。その後、僕はコートなどを着て、司書室をあとにした。

職員会議のあと、ネギ君はちょうど2・Aの授業だったのでそのまま教室。僕は1限はこの授業もなかったので…

「なんで保健室にくるんだよ。自分の仕事はなにかないのか。」

「だって一応宿題とかはした…あ、宿題っていうのは僕が僕に課してるやつだから。」

僕は保健室にいた。デイルに相談したくて。

「ねえデイル、朝も言ったけど僕の髪、長いほうか短いほう、どちらがいい？」

「どっちがって…それはウルがきめたらいいんじゃないのか？」

「へう…だって僕はどっちでもいいかなあって思ってるし…」

「だからと言って僕に聞くのもどうかと思うが…」

あう…やっぱりそうだよね…

「まあ僕は長くても短くてもウルはウルだしどうも変わんないさ。…しかし長いとあれだ。女の子に見えなくもない。」

「ふえ！？僕そんなに女々しいの??」

「いや、そういう意味じゃない。日本語ちゃんと理解したのか…だから、長い髪でその可愛い顔、女の子に間違われてもおかしくないってことだ。」

あ、そういうこと…って女の子に見える！？それはやばいかも…今は完全に女の子だし…

「あう…やっぱり短くしないと…」

「まあどっちにするかはウル次第だ。どっちにしても髪をのばす薬くらいウルなら作れるだろ。切って失敗したと思ったらまた伸ばせばいいんだ。」

なるほど…そういうこともできるか…

「うーん…とりあえず保留ってことにする…あ、そろそろ1限終わりだね。僕2限は2 - Aなんだ。じゃあね。」

僕は保健室をあとにした。

とりあえず適当に資料とかを持って2 - Aに到着。

「あう…開けない…」

両手ともふさがって開けなかった。あう…なんでそんなことに頭が回ってなかったんだろ…

「あ、ウルル先生。今お開けしますわ。」

ちょうど後ろから…えっと28番の雪広さん…クラス委員長だよね。

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ。」

と、ちょうど入ったところでチャイムになる。

「きりーつ、気をつけ、礼ー、着席ー」

ちゃんと礼をしてから授業開始だ。

「えつとじゃあ授業を始めます…」

あう…やっぱり緊張するなあ…

「引継ぎなので…教科書は…76ページ…であってますか？」

「大丈夫ですわ。ウルル先生。」

ありがとうございますといってそのまま授業を進める…

- s i d e アスナ

「引継ぎなので…教科書は…76ページ…であってますか？」

…ネギと一緒にきたあのウルルって子…やっぱり魔法使いなのかしら…

私はかんぐる。ネギが魔法使いとわかった。一緒に来たあのウルルってガキもまた魔法使いなのかも…でも普通に飛び級ってことも…あゝ！わかんない！

「えつと…神楽坂さん…？なにかわからないところでもありましたか？えつと僕、まだまだ未熟で…」

「え？あ、なんでもないです！；」

その後、「こらーアスナール先生困らせるな」とか聞こえてくる。逆、私を困らせてるのがウルルってガキなのだ。

うーやあっぱり何かして試そうかしら…そうだ、消しゴム！

私は消しゴムを少しちぎって昨日ネギにしたように指にのせ…ってこれ何もなかったのよね…まあいつか。…GO！

「！あ、画鋏。」

こつちを見てないのにぴくつと何かに反応してからしゃがんだようにみえた。まさか消しゴムに気づいたってことは…
もう一回…行け！

「は、はつくちゅん！」

ちょうどくしゃみで頭が下がったところに消しゴムが通過。なによ、なんで避けれるの…？

そのまま。授業中、タイミングを変えて何回もやったが結局当たることはなかった…

- side out

「では…ちょっと早いですが終わりにします。」

「きりーつ、気をつけ、礼ー」

と礼をしたらちょうどチャイムになる。ほ、よかった。無事に授業

できた…にしてもなんであんなに消しゴムのかけらがとんで…多分アスナさんが飛ばしてたんだろっけど…
僕は教室をあとにする。

「あ、ウルル。」

「あ、ネギ君。」

ちょうどそこにネギ君が。

「初授業、どうだった？僕は失敗ばかりで授業できなかったんだけど…」

「うん、僕は大丈夫だったよ。…あ、そういえば多分アスナさん、僕のこと疑ってるね。消しゴムのかけらを飛ばしてきた。」

「あう…やっぱり疑うよね…ゴメンねウルル、迷惑かけちゃって。」

「ううん、当たってないからいいけど…多分そのうちあきらめると思うし…あ、僕は他の先生について授業見るんだった。じゃあねネギ君」

「あ、うんゴメンね。」

僕は次の…確か2-Fが次だったのでそのクラスへとすすんでいった…

放課後。

「はうゝ…やっぱり他の先生は授業うまいなあ…僕も見習わないと…」

僕は廊下を歩きながらそうつぶやく。とどたどた音が聞こえる…

「なんのおこ「ウルル危ない！！避けて！！」何！？」

ダダツと何人もの生徒がネギ君をお…う…あれ…？なんかすごくネギ君が恋しい…

「待って！ネギ君！！」

僕も追うみんなの中に紛れ込む。そして先頭、そのままネギ君に追いつく。

「どうしたのネギ君？」

「ウルル！それがあの薬、固形のままつかつちゃって…ゴメン！」
なるほど…惚れ薬と思い込んで固形のままのんだってこと…

「大丈夫、あれくらいの大きさならじきにおさまる…あ、こっち。」

僕は空き教室にネギ君を連れ込んだ。そして鍵を閉め、息を殺す…

「…ふう…行つたみたいだね…ほんとゴメンね、ウルル。君まで巻

き込んで…」

「ううん、大丈夫…それより…」

僕はネギ君に近づく。

「え？どうしたのウルル？」

「なんでもないよ…」

すこしずつ、すこしずつ近づいていく…

「ふえ！？ちょ、ウルル！！」

「ネギ君…す…」

「こらー！あんたら男どうしてなにやってんのー！！」

アスナさんの声が。

パンツと扉が蹴破られ僕たちのほうに飛んでくる。僕は無意識に防御魔法を使う。そう、扉をはじいたのだ。

「んな！？こら、やめやさいつて！」

僕はアスナさんに抱きかかえられる。

「はっ！？僕は何を…」

僕は意識を通常に持ち直した。多分惚れ薬と思い込んで使った結果だろう…あれ？これってどんな思い込みで…

「はわっ！アスナさん！？助かりましたあ…」

これで一旦は片付いた…と思った。

「ねえ…ウルル先生…あんたも魔法使い…なんですよ。」

ば…れ…た…？

「なんで…」

「さっき私が飛ばした扉、なんらかしてはじいたでしょ。」

「そ、それは僕が危ないとおもっていいよネギ君。」でも…

僕はアスナさんから離れる。

「できればネギ君と同じように黙ってほしいんですが…そうです。僕も一応魔法使いです。でも黙ってられないというなら記憶を、ネギ君の分まで忘れさせます。…大丈夫です、副作用も何もない、この薬でなら何も苦しまず、かつ一瞬で忘れられます。しかしこれ、数日分の記憶を失わせる薬なので記憶の混濁が起こりますので…さあ、どうします？忘れます？それとも黙っててくれますか？」

僕は薬を取り出しみせながら交渉する。薬は奇妙な青、緑、紺…そんな変な色をしている。かなり脅すにはいい材料。と言ってもほんとにこれは記憶をけす薬ではない髪を短くする薬。いつ伸びても大丈夫なようにもちあるいてたやつだ。

「なによ、おどすっての？」

「いいえ、交渉です。多分ネギ君からも言われたのでしようが僕は今仮免期間です。ばれたら連れ戻される、悪ければオコジヨにされる。ちなみに僕、ここで言うത്卑怯なのですが身寄りがありません。つまり孤独。両親は2歳のときに他界。僕はそのときから記憶があります。ずっと孤独に生きてきました。僕は今のこの楽しい生活、なくしたくありません。…さあ、アスナさん。最後に聞きます。記憶を失うか、黙っているか、僕たちのことをばらすのか…」

「ウルル…性格変わってる…」

「それだけ真剣なんですよ、ネギ君。」

僕はそういうもアスナさんからは目をそらさない。僕はずっとらむように見つめる。

「く……ってまあもともネギの地点で黙ってるって言ったんだしあんたのことも黙ってるってもとときめてるの。いちいちそんなこと言わないでもいいのに。しかも…なんか同情しちゃうじゃない。」

「ほんとに…だまっててもらえるんですね？」

「そうよ。ネギは黙っててあんただけはらすってのもおかしいですよ。」

「…はう…よかったあ…」

僕は気が抜ける。もしばらされたらって思ったらつい…

「ありがとうございますう〜…」

「…ねえ…それ、本当に記憶を消す薬なの？」

「ふえ？あ、これは違いますよ。まあ僕の常備薬ってところです。」

「なんだあ〜…」

え？なんで落ち込むの？？よかったあとか安心するところじゃないの？？

「まあいいわ。さ、さっさと帰るわよ。」

そういつて教室の外に出て行くアスナさん

「あ、待ってください！！」

それを追いかけていくネギ君。

「あ、ウルル！あとで司書室に顔出すね。じゃあ！」

「うん…」

二人はいなくなり僕だけ残される。

「はう…ホントによかったよあ…もしばらすとかいわれたら…へう…
…もういいや。帰ろう…」

僕も今いる空き教室をあとにした。

その後。

「はうゝ…今日はいろいろあつて疲れたなあ…」

僕はちょっと休憩にとホットミルクティーを淹れる。

「学ぶこともいっぱいあつたし…魔法のことも…へう…」

ばれてしまった。それはちょっとやばい…けど黙っててくれるってことだし気にするのはやめよう…

とそこにトントントとドアをたたく音。多分ネギ君だろう。

「はい。」

僕はドアを開ける。そこにはたくさん…え？

「お邪魔しまゝす！ウル先生こんばんわゝ」

「え？なに？何？どついう事？」

「ごめんねウルル。僕の部屋で勉強会してたんだけどアスナさんに追い出されちゃって…」

なるほど…で、なんで司書室に??

「他の寮の部屋で広いところがなかったんですよ。」

「そうなんですか…」

とりあえずみんなを中に入れる。総勢ネギ君合わせて5人。

「ここがウルル先生の生活空間ですの…」

と雪広さん。

「へえ〜結構片付いてる。」

とハルナさん。

「ウルセンセ、こんばんわ。」「こんばんわです。」

とのどかさん、次いで夕映さん。

「あれ？ウルル…そんなに髪長かったっけ？」

…は、忘れてた…

僕の髪、ちょうど帰ってきたあたりでもとにもどったんだ…ネギ君しか来ないって思ってたから…

「あの…えと…」

みんなが僕のほうを見て…え？なに？なんで近づくの？

「ふえ？なに？どうしたの？」

「あの…ウルセンセ…髪、いじらせてもらっても…」

「むしろいじる」

「あわあゝ!!」

と、僕は取り押さえられた。そして適当ないすに座らされ…

「すごいです…さらさらで手入れも行き届いてるです…」

「あうゝ…みなさん勉強しにきたんじゃ…」

「まあちよつと休憩つてことで」

「あうゝネギくゝん…」

「あははは…」

そのまま20分くらいはいじられました。

でその後、少し勉強して生徒たちは帰っていった。残るのは僕とネギ君。

「へうゝ…なんでこんな…」

僕はツインテールにされたりポニーにされたり、最後は後ろ真ん中あたりに三つ編みを作られそのまま。

「まあ…その…似合ってるよ?」

「うん、ありがと…じゃないよ!」

「あははは」

と笑い話になる。ってそうだ。僕はいちいちネギ君に残ってもらったんだ。薬のこと聞くために。

「ねえネギ君。薬のことなんだけど…」

「あ、あの…用法だけみて…で注意書きのことぱっとみただけで…その…ごめんなさい…」

やっぱり固形のまま…ってそれはさっきも言ってたよね。

「なんでネギ君が？」

「その…アスナさんが自分がのめって僕にひょいっと…」

なるほど…飲まされて…じゃあ…

「ネギ君は飲み込んだときどう考えてたの？」

「えと…多分これを異性を惚れさせる薬と思わせて飲んでもらえれば…ってかんじかな？」

ふむふむ…なるほど。それなら確かにあんなふうになるか…

「あれ？そうしたらおかしいな…なんでウルルまで僕に…ウルル、男の子だよな？」

「へう！？」

しまった…なんでそう切り返すのかな…あう…どういえば…

「おかしいなあ…どんな人でもと考えてたのかな…それなら途中すれ違った先生とかも…ぶつぶつ…」

あう…ネギ君考え出しちゃったよ…はう…本当のこと言っただろうが…でもネギ君に嫌われるかも…あうあう…

「ウル…いるか…？とネギもいるのか。」

ちょうどそこにディルが来る。あわ、このことはディルも知らないはず…どうしょ…

「ねえディフォルトさん。もし異性が惚れる薬を僕が飲んでウルルが僕に惚れるってことは…」

「は？…あ、そうか。ウル、今日君、女の子の日だろ。確か昨日は男だったはずだ。」

「え？…なんで知ってるの？…」

僕は驚く。だって僕はこのことは誰にも、ディルにすら言ってないはずだ…

「まあそれは…その…この前着替えを見たときに…ね。」

！！？？そんな！？みてたの？僕の裸を見たの！？

「見たの！？見たんだね！？見たんでしょ！？あう…僕もうお嫁…

じゃなかった、お嬢にいけない！」

「まあそのときは僕が…じゃない。で、今日は女の子なんだろう。多分の領域を出てないんだが僕の予想では一日周期で男女が入れ替わるんだろ。多分1年くらい前からか。」

「…うん…今日は女の子なの。多分そろそろ変わる頃かな…」

僕とデイルはそんな会話をするとネギ君はついてこれないので頭の上にハテナを浮かべている。

「ねえウルル、デIFOルトさん、どういうこと??」

「ああ…それは「僕が説明するよ。」…だそうだ。」

僕は一步ネギ君のほうに近づく。

「えつとね。僕は一年前に…(略)」

僕はネギ君に説明した。僕が薬を作って失敗したことで性転換のことを。

「へえ…ウルルも大変だったんだね…」

「まあ性を隠すっていうのは難しいな。」

「僕の失敗だし仕方ないよ。…っとネギ君、寮はそろそろ門限じゃない?」

「え?あ、ホントだ!じゃあウルル!また明日!」

急いでしたくしてネギ君は出て行った。

「さてディル…」

「ん？なんだ？」

「僕の裸…見たんだよね…」

「あ…」

僕はディルに少しずつ近づいていく。そして目の前に。

「しゃがんで。」

「あ、ああ………」

「ほんとにお嫁…お婿にいけなくなったらもらってもらうんだから………」

僕はそうとだけいってディルを部屋から追い出した。

2 限目 新薬『思い込み薬』（後書き）

というわけだね。 2 話目終了ですよ。

ウル君は今後どんな風になるのか楽しみです^^
デイルとの関係はどうなるのかとかねww

では、また次回お会いしませう^^ノシ

3 限目 ウルルとネギの最終課題（前書き）

どうも、ユキです！

スランプ脱出できずにいますww

プロット組み立てるのに3ヶ月かかりました…。（2週間前くらいから友達の力を借りて急ピッチで組み立てました。）
でもかなり原作に会うように練ったつもりです^^

ではどうぞ。

3 限目 ウルルとネギの最終課題

いつものように清々しい朝。僕はいつものように行く準備を整えてのんびり朝食を摂っていた。

「はあゝ、やっぱり朝はミルクティーでのんびりだね。」

「そんなにのんびりで大丈夫なのか？まあ僕には関係ないけどね。」

「えっと、あと15分くらい余裕が……ってなんでデイルがここにいるの！？」

僕の隣にはいつの間にかデイルが座って自分で入れたのかコーヒーを飲んでいた。

「まあ本音を言えば朝食をたかりにね。建前はウルの様子を見にきた。」

「言う順番逆だよなそれ！？」

「まあまあいいじゃないか。っと、ウル、時間だ。今日は1限に授業あるんだろう？。」

ぱつと僕は時計を見る。すると行く時間5分前だった。

「そつだ！今日は1限からだ！んじゃ、行くね！」

「ああ。鍵は僕が閉めておくよ。」

僕は急ぎ足で司書室をあとにした。

校舎の前、今日も人でごった返している。

僕は通り過ぎていく生徒たちを見過ごし何度見てもすごいなあと思う。

「あ、ウルル先生おはようー！」

「おはよう、ウルル先生。」

「ふえ！？あ、おはようございます！」

いきなり後ろから話しかけられて僕はびっくりする。後ろを向くとそこには

「えと…大河内さんと春日さん…ですよね。」

「お、覚えてるんだ。」

「あの、これでも2・A副担ですから…／＼」

「んじゃ、私ら行くね。」

そう言つて二人は先に行く。そのあとにも何人かに挨拶された。ちゃんと生徒の名前。いえてた…よね？

それだけ考えて僕は1限の授業のクラスに向かった。

- side 近右衛門

「なるほどの。ネギ君もウルル君もどちらも上手くやっておるか。」

「はい。ネギ先生のほうは生徒との打ち解けも早く授業内容もがんばってます。ウルル先生のほうはもともと対人が苦手なので一対一で話すのは苦手ですが生徒の名前は覚えています。また授業内容はネギ先生より充実しています。」

学園長室に園長としずなの二人。二人の子供先生について話している。

「デイフォルト保健医は功績もさながら、保健室登校の生徒の零化まで報告が来ています。」

「ふおっふお。デイフォルト君は優秀じゃの。ならば彼は4月から正式採用でよさそうじゃの。（課題で出そうとしたことを先にやってしまふとはの…）」

「ネギ先生、ウルル先生、この二人。私は一応合格点を出してもいいと思ってますが…」

「そうじゃの。ならば二人も4月からは正式採用かのう。ご苦労じやったしずな君。」

二人は握手を交わす。そして手を放すと園長の目が変わる。

「ただし、二人にはもう一つずつ、課題をクリアしてもらおうかの。才能ある立派な魔法使い（マギステルマギ）の候補生として…」

- side out

「あわわ、質問に答えてたらHR開始の時間過ぎちゃった。」

僕は急いで2 - Aに向かう。それにしても他のクラスをみると何かピリピリした感じを覚える。

なにやらノートやらを持ち寄って話し合っている。

「何かあるのかな……」

ボソツとつぶやいて僕は先を急ぐ。

クラスの前に到着すると何故か中ではしゃぐような声が聞こえてくる。

何かレクリエーションでもやってるのかな……？

と、思っ僕はクラスの扉を開ける

「……バカ五人衆参上……!!」
レンジャー

「……………え？」

ドーンと戦隊物のように煙が上がるような感じを想定したようにポーズを決めている。かっこいいような気もするが、このポーズを決めた全員、半裸である。

「何これ…?」

「あ、ウルル〜!」

僕が立ち止まって啞然としてしていると横からネギ君の声。

「これ、どういうことなの?」

「それが期末テストが近いから勉強会しようってことだったのに…」

あ、他のクラスがピリピリしてたのはそういうことだったのか…

「それで、うちのクラス、万年最下位みたいなんだ…」

「ふえ!? そうなの!?!」

「うん、図にするとね…」

そういつて簡易的な成績表のグラフを出す。

「なるほど…トップこそいるけど下辺もいる…したの五人…さっきの…」

バカレンジャーって言ってた五人だ…

「それでねウルル、僕の最終課題がね、期末で2 - Aの最下位脱出なんだって…」

「ふえ!? そうなの!?!」

「うん…どうしよ…このままじゃ強制帰国だよ…」

あわわわ…どうしよ…このままじゃネギ君と離れ離れに…あう…
どうにかして…

そうだ！3日間だけすごく頭がよくなる魔法が…でもこれは副作用
が…あう…

僕は考え込む。周りを気にせずに。

「…せ、ウルセンセー！」

「ふわ！？な、なんですか！？」

ゆすられてようやく気づく。のどかさんに呼ばれてたみたいだ。他に
周りには誰もいない。いつの間にかHRが終わっていたみたいだ。

「あの…今日って新刊の入荷の日じゃ…」

「え？んと…あ！」

確か今日は多めに新刊が来てるはずだ…

「他の委員の人も待たせてるかも！のどかさん、急ぎましょう！」

「は、はい！」

僕は図書委員の人たちに伝えてある新刊の到着場所に急ぎ、皆に
加わって運び作業、そして納書チェックとやることをこなしていっ
た。

「ホントに皆さんすみません！僕が遅いばかりに少し遅くなってしまうて…」

ブルルルル…ブルルルル…

納書チェックの途中、受付の電話が鳴る。

「電話だ、なんだろう…はい、図書館島総合受付です。」

「おおウルル君かの。わしじゃ、今からちと学園長室に来てくれるかの。」

「え、あ、学園長ですか？はい、じゃあすぐ向かいますね。」

「すまんのお。ではまっとるぞ。ふおっふお。」

それだけで電話は切れる。あ、呼び出し内容とか聞いてないや…

「すみません皆さん、僕ちょっと学園長に呼ばれてしまったので後はお願ひしてもいいでしょうか？」

「あ、はい。後はこちらで何とかします。チェック後の印鑑だけお願いしますね。」

「では、終わったら司書室に置いてください。では行ってきます。」

僕は図書館島を後にした。

向かっている途中、どこかから声が聞こえる。

「
誓約の黒い三本の糸よ

」

ネギ君の声だった。

僕は声の聞こえた近くの林を見る。

「
我に三日間の制約を

」

ネギ君は何かの魔法を……あ、僕は急がないと学園長に呼ばれてるんだった！

僕はその場を後にする。

「あれって…確か封印の……ネギ君、どうしたんだろ…」

学園長室につく。僕はノックをして学園長室に入った。

そこで話したのはネギ君に課題が出たように僕にも課題を出すとのことだった。

その課題の内容は…

図書館島に戻り一応皆がまだいるか確認する。

「まだ、だれかいますか…?」

返事は返ってこない。誰もいないみたいだ。
僕はいないのを確認し司書室に戻る。そこでチェック後の確認印を
押していく。

「……これで最後つと。」

最後の一枚に印鑑を押し終えて一息つく。

「へうゝ…印鑑押すだけっていうのも疲れるなあ…」

僕は席を立ってミルクティーを淹れに行く。

「そういえば僕の課題…」

なんでも『動く石像ゴレムを創れ』とのことだった。サイズとかは指定されなかったけど…『大きい方が評価は高いの、ふおっふお。』とも言っていたような…

「どっちにしてもこの司書室内じゃ創れないよね……早く作るに越したことはないし別荘で作っちゃおつと。」

材料とかは多分別荘内にあるもので足りるだろうと思って僕はすぐに別荘に籠る。

籠って6時間。大体の型はできた。後はどう動かす形式のゴーレムかだ。

「命令タイプか操作タイプか…ん…命令タイプはちょっと難しいんだよなあ…」

命令タイプは半自動だから思考経路があるからなあ…操作でいいかなあ…

「操作でいいや。こっちの方が汎用性ある…よね…?」

そしてまた僕はゴーレム作成に時間を費やす。

別荘に入って計12時間が経過した。

「あとは魔法でコーティングして完成だあ…」

僕はエーテル水をゴーレムにかけ、崩れたり、簡単な衝撃じゃ壊れないように鉄くらいの硬さを演出した石にする。

「これで完成…かな。」

計13時間経過。ゴーレムは完成した。

「これでは学園長に渡して終わり…なんだけど…どうしようこれ…」

少し大きめに作ったので持っていくには少々目立つ。

「うーん……まあいつかあ。明日考えよう。ふあ……」

僕は別荘から出て寝ることにした。

トントン

僕がパジャマに着替えてベッドに行こうとした時、ノックの音がする。

「こんな時間に誰かな……はーい。」

僕は扉を開ける。とそこには

「夜分遅くにすみませんです。寝る前で申し訳ないのですが一緒に来てもらえないですか？」

えと……綾瀬さん……後ろにのどかさんもいる……

「えと……なんのよ「くればわかるです。」……わかりました……。」

綾瀬さんが有無を言わさないような迫力で迫るので僕はyesで答えてしまった。

「じゃーれっつー……」

後ろのほうから早乙女さんが飛び出してきて僕は捕獲され、そのまま連れて行かれてしまった。

連れて行かれた先にはバカレンジャーの皆さんとなぜかパジャマ姿のネギ君が集合していた。

「あれ…皆さんどうしてここに…」

「実は私たち、今から図書館島の地下図書室に本を探しに行きたいのでウルル先生には引率をお願いしたいのです。」

「そ、そうなんですか？あの…それならネギ君が…」

そう言つて僕はネギ君のほうを見る。いかにも眠そうにあくびをしたりしている。

「あ、ネギ先生もいたですか。それならどちらかで…」

「べ、別に二人が引率でもよくない!？」

いきなり話を聴いていたらしい明日菜さんが横から言う。

「いえ、ここはどちらかの先生に残ってもらい、私たちが司書室で勉強しているということにしてみました。たほうが何かと問題おきなくていいです。」

「えー！皆で行ったほうが絶対楽しいよー」

またまた横からまき絵さんが会話に入ってくる。

「いえそこは…」

みんなが言い合っている中、明日菜さんが僕とネギ君に耳打ちしてきた。

「トラップがあるみたいだから危なくなったら魔法の力で私たちを守ってよね。」

「ふえ！？地下にはトラップあるんですか！？」

「そうらしいのよ。」

うえゝ…トラップかあ…怖いなあ…

「あの…魔法なら僕、封印しましたよ。」

「え…」

「「ええゝゝ！？」」

僕と明日菜さんが一緒に驚いたのもつかの間、明日菜さんが何かたくらんだような顔をしてから、目を光らせて僕を見る。

「やっぱり、図書館のことだしウルのほうが適任じゃないかなあゝ」

みんなが口論してる中にわざとらしく大きな声で明日菜さんが言う。

「そうですね、やはりここはウルル先生についてきてもらったほうがいいです。」

「えゝ皆でのほうがいいのにゝ。」

「もう時間がないし行こう！」

「ふえゝ！！！？？」

明日菜さんは僕をつかんで入り口のほうに向かっていく。

「ではネギ先生はのどかたちと残って何かあったときのフォローをお願いしますです。」

そうして、僕たちは図書館島地下への扉を開いたのであった……

3 限目 ウルルとネギの最終課題（後書き）

このまま図書館編続きます^^

多分3話分くらい？

最後の最後で大どんでん返しが…あるのかな？あったらいいな…

一応プロットは出来てるつもりなんで早めにupしていききたいと思います。

ではまた〜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0736q/>

ネギま!～もう一人の子供先生ウルま!?(仮)

2011年10月7日04時44分発行